

あとがきにかえて

和訳をさせることで英文の理解を確認ができ、学習も進むのでしょうか？

私は、日本人英語学習者に和訳をさせるには条件があると考えています。それは、

- ・学習者が、英語の基礎（品詞感覚，構文理解）を身につけていること
- ・品詞を意識して辞書を引けること

です。この条件に適合しない学習者に和訳（予習や試験）を課すと、単語の訳を適当につなげて訳文をでっちあげる危険性が生じます。品詞を意識せずにしゃにむに辞書を引くことにもなります。「英語の見える化」では、授業の前に和訳を与えてしまうことを基本にしています。その場合、和訳は英文理解のための補助であると考えています。学習者が英文のテーマや内容を容易に理解（イメージ）できるのであれば、和訳の前渡しは必要ないでしょう。いずれにせよ、学習者による和訳の前に英文理解があるべきです。「英語の見える化」では、教師の指導の下で、記号づけとチャンク訳によって英文を正確に理解していきます。この時、通常のと訳では曖昧になりがちな品詞や構文を明確かつ簡潔に示し（見える化し）、英文を英語として理解することを助けます。学習者自身に記号づけやチャンク訳をさせることは、学習者の理解度の見える化にもなります。なお、チャンク訳では語尾に注意します。日本語文での語句の役割（英文での品詞）は助詞などの語尾に表れるからです。

英文の内容を選択肢で問うことで英文の理解を確認できるのでしょうか？

TOEIC や英語で書かれた教科書などでは、英文理解の確認のために、英文の内容を選択肢で問います。ラテン系の言葉を話す学習者が対象であればともかく、言語構造が全く異なる言葉を話す日本人の英語基礎力を判定するには適当な方法ではありません。これは個々の英文の理解を直接確認する方法ではないので、学習者が単語の知識等で推測して解答することを許してしまいます。学習者の英語を学ぶ姿勢にも良くない影響を与えかねません。正しい選択肢を選べる学生の多くが実は個々の英文を理解できていなかった例が、実際の大学の授業で「英語の見える化」によって示されています。

「わかりました」という言葉に安心してよいのでしょうか？

「わかりました」と生徒に言われることは嬉しいことですが、「説明がわかりました」と「英語がわかりました」は、違います。英語がわかるということは、英文と理解（イメージ）が直結するようになったということであり、そのためには学習方法の特別な工夫と音読などの努力が必要です。「説明がわかりました」は一過性のものになりがちです。易しい英文教材を使っても「英語がわかる」ということは、多くの日本人英語学習者にとって初めての体験になり、感動が表情に表れます。その喜びの表情をまた見たくて、私はこの冊子『英語の見える化』を作ったのかもしれない。

英語の基礎を身につけるには「物語」に限る

長年の教育経験でたどり着いたこと、それは、英語の基礎を身につけるための英文教材として、理系の大学生であっても、社会人であっても、物語が最適だということです。子供が母語を身につけるためには、膨大な時間をかけて体験を積み重ねて言葉とイメージを結びつけるわけですが、それを短時間で効率良くやるには、言葉からイメージを描

きやすい英文を選ぶべきでしょう。物語にはストーリーがあり、場面のイメージが掴みやすい英文になります。物語以外でも、興味・関心があって内容を理解しやすいものであれば、物語と併用してもよいかもしれません。一番良くないのは、英語と同時に外国の文化などを学ばせようとする事です。「二兎を追う者は一兎をも得ず」です。

最後に、英語を試験科目として勉強してきた状態から、人の言葉として身につける学習に切り替えるためには、

- ・英語が人の言葉であることに気づく
- ・単語の知識と英語学習への慣れによって英文の意味を推測することと、英語を英語として理解することの違いに気づく
- ・英語を英語として理解することが、自分にも可能であることに気づく

というような気づきが必要です。そのための導入指導、初期指導に工夫と努力が必要ですが、語学学習で最も大事なモチベーションをいかに持たせるか、ということも難しい問題です。大学の通常の授業では、教育学習メソッドの改善、教材の選択に加えて、専門教員との協力、留学生 TA の採用などの工夫が必要となりそうです。

Q & A

Q1. 予備校にも教師が記号を使って説明する英語の授業があるようですが、「英語の見える化」との違いは？

予備校の英語指導の目的は、問題を解くこと、点数を取ることです。そのための英文の説明に**記号**は有効ですが、受験知識や問題解答技術を偏重する傾向は否めないでしょう。「**英語の見える化**」の目的は、英語を英語として、人の言葉として理解することです。学習者自身が記号をつけることによって、英語が見えるようになることを目指しています。使用する**記号**は、純粹にそのために工夫され、教育現場での経験によって完成度が高められたものです。見かけ以上の違いがあります。

Q2. 副詞句が [] なら、形容詞句は < > で囲んでもいいのでは？

教師が**記号**を使って説明するだけであれば、それも1つの方法です。しかし、前置詞句は、**形容詞句**、**副詞句**、いずれとも解釈できる場合があります。学習者自身が記号をつけるのであれば、まず前置詞句を [] で囲んでしまうのが効率的です。**形容詞句**と判断されれば右肩に「a」を追加するだけです。判断がつかない場合は「(a)」**、**直前の名詞ではなく離れた名詞を修飾する場合に「-a」で示すような手法も使えます。

Q3. 英語の語順を重視するのであれば、副詞(句)にも順番があるのでは？

たしかに、動詞の後では「態度・状態、場所、時間」の順というきまりがありますが、「名詞+**形容詞句**」の**形容詞句**のように前後の語句と密接なつながりがあるわけではなく、新情報であるために文末に移される場合もあります。**副詞(句)**が置かれる位置は多様です。置かれる位置によるニュアンスの違いは、英文を英語として理解しながら読むことで身につけていくべきものです。